

「ことば・文字・女の解放」論壇をめぐって

About Mini Symposium “Words, Letters, Women’s Liberation”

湯山トミ子*
Tomiko Yuyama

Abstract

Our joint research project at Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University, titled “Invention of Identities and Development of Pluralism: From the Perspectives of Asia/China”, hosted a symposium “Words, Letters, Women’s Liberation” at Ochanomizu University on December 12, 2010.

The idea of the symposium had been proposed to the Gender History Association of Japan to be one of its Free Panel Discussion programs at the Association’s Seventh Annual Conference, and was accepted and carried out to become the third conference for the project.

The aim of the panel was to discuss the aspects of gender in language and identity which was not treated at the first symposium of the project, titled “Search to Pluralistic World: Language and Identity in Age of Empire” held on November 13, 2010. This paper reports on the discussion at the symposium, the organizer’s assessments, and the topics to be studied further in the future.

1. はじめに

2010年12月12日 お茶の水女子大学において、成蹊大学アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「アイデンティティの創生と多元的世界の構築 アジア・中国の磁場から」(以下アイデンティティプロジェクト)により、ミニシンポジウム「ことば・文字・女の解放」(Words, Letters, Women’s Liberation)が行われた。この論壇は、プロジェクト第3回研究会として企画され、ジェンダー史学会第7回大会自由論壇の公募に応募、採択され、開催の運びとなった。内容的には、2010年11月13日に開催されたアイデンティティプロジェクト第1回シンポジウム『多元的世界への問い 帝国の時代の言語とアイデンティティ』(於成蹊大学)で取り上げなかったジェンダーの視点による「言語とアイデンティティ」の課題について論議することを目的に行われたものである。本稿は、当該論壇の主題「ことば・文字・女の解放」の解題、当日の論議、ならびに本特集に改めて寄せられた報告者の論考を踏まえて、主催者の立場から、論壇開催の意図と今後の考察課題について報告する¹⁾。

* 成蹊大学法学部教授、Professor, Faculty of Law, Seikei University
E-mail: yuyama@law.seikei.ac.jp

¹⁾ シンポジウムの開催資料、記録の概要は、湯山(2011) 136-142頁に収録。

II. 論壇企画意図と構成

本論壇は、第一部に中国固有の女性文字「女書」研究で知られる遠藤織枝元文教大学文学部教授、第二部に社会言語学の視点から言語と女性を読み解く田中克彦一橋大学名誉教授を迎え、プロジェクト代表者湯山がコーディネーター役兼座長を務めた。参加者30名ほどの小規模討論会ながら、報告と質疑併せて2時間余り、規定時間を越えて密度の濃い意見交換が展開された。2つの報告は、第一部「文字と女性 アイデンティティ世界の創生」、第二部「漢字と女 組み込まれた女性表象」により構成され、それぞれ異なる視点、対象から「ことば・文字・女の解放」の主題を照射し、考察した。本稿では、まず本論壇成立の背景、要因を述べ、2つの報告が拓いた論点との関わり、意図を明確にする所存である。論旨の展開上、シンポジウム当日の講演順序とは逆に、第二部「漢字と女 組み込まれた女性表象」から取り上げることにする。

III. 論壇の起点 “女” 偏をもつ漢字改訂の提起

本論壇の企画成立の背景には、2010年1月中国のインターネット上で提起された、“女” 偏をもつ漢字16文字に対する異議申し立てとその修正案の提起、ならびに3月東京の浅草で開催された「女書」と現代芸術を連係したユニークかつ貴重な展覧会「女書：アート×学術の連歌²」が挙げられる。“女” 偏をもつ漢字に対する異議申し立ては、日本では、一過性のニュースとして取り扱われ、一時インターネット上に批判的意見が多少見られたにすぎず、その後、特に、大きな話題となることはなかった。「女書」については、専門家である遠藤教授の論文が本特集に収められているので、ここでは当該論壇開催の起点となった“女” 偏をもつ漢字に対する異議申し立てと改訂案にもられた主張、内容を紹介し、それを基盤に当該論壇を構成する基本点を明確にしていきたい。

2010年1月21日、中国上海在住の弁護士葉満天氏が自身のブログで、中国国務院国家語言文字工作委員会宛てに、“女” 偏の漢字16文字に関する異議申し立てとその改訂要請を行ったところ、たちまちインターネット上に賛否両論 葉氏曰く賛成3分の1、反対3分の2の論議が湧き起こった³。葉氏が提起した16文字とは、“娛”、“耍”、“婪”、“嫉”、“妒”、“嫌”、“佞”、“妄”、“妖”、“奴”、“妓”、“娼”、“奸”、“姘”、“嫖”、“嫖”で、葉氏は、これらの漢字が「等しく貶義をもち、児童の学習過程、一般人が文字を書いたり、読んだりする過程で、視覚的に16文字と女性の性別を基本的に連係し、女性に対する評価を知らず知らずのうちにおとしめている」と述べ、“娛”、“嫉”、“嫖”、及び“奸”を取り上げて、その字義を中国でもっとも規範的な中型中辞典『現代漢語辞典』（人民文学出版社）の解釈に照らして分析し、貶義が生じる理由を明示した上で、それらの文字の“女” 偏を、行人偏に改めることを提案した。葉氏の分析の基本内容は以下の通りである。

² 2010年3月26日～5月9日、東京・浅草Gallery efで、遠藤織枝教授所蔵の「女書」と現代アート石塚ユカ氏の連係に拠る「女書：アート×学術の連歌」が開催された。

³ 本論では、繁雑さ避けるため、すべて日本漢字で表示した。ブログは、葉満天氏の氏名の簡体字表記“叶满天”で記されている。葉（2010a）。なお丹藤（2010）では、葉氏のブログでの提起は、2010年1月10日とされている。本稿は葉満天氏のブログ記載の期日に基づき1月21日付として記載している。同ブログでの閲覧は、2010年1月20日以降のものに限られているため、1月10日のブログは、インターネット上では確認できない。賛否両論の状況については、4月1日のブログ、葉（2010c）による。提起に対する賛否の論議は一部がブログ上に記録され閲覧できる。

葉氏により取り上げられた“娯”、“嫉”、“嫖”、及び“奸”は、いずれも形声文字である。“女”編に音声“呉”(wu)をもつ“娯”は、一見中性語に見えるが、『現代漢語辞典』では、「快樂、及び人に快樂と気晴らしをさせる」意味をもつ点から、「女性を男性の気晴らし、もてあそびの対象として、快樂を得る」という直感的イメージ、意味を含み、女性の心懸、思惟を尊重せず、明らかに軽んじる見方が示されている」として、行人偏に、“呉”(wu)の旁に改めることが提案された。次に、“女”偏に、“疾”の旁をもつ“嫉”は、『現代漢語辞典』によれば、「他人が自己に比べて良いことを恨む」と解釈されている。しかし、葉氏は、中国の歴史上でもっとも有名な嫉妬といえば、男性の英雄である三国志の諸葛亮と周瑜である。にもかかわらず嫉妬に“女”偏が使われているのは、「この文字の生まれた時代の女性に対するきわめて強い偏見を示すものと言える」、これも行人偏にすべきである。それにより、人には、他人が自分より優れているとは思いたくない病 嫉妬があることが示される。第三番目に挙げられた“嫖”は、『現代漢語辞典』では、「娼妓を弄ぶ墮落した行為」であり、人がしてはならない「食べる・飲む・買う・打つ」(“吃喝嫖賭”)という日常よく見かけることばに含まれている。それは、生業につかずぶらぶらして働かない無頼の徒の下劣な行為を示すものであり、その行為者とはほかならぬ男性である。旁の“票”は、現在多くの人が“鈔票”(紙幣)と理解するから、“女”と“票”が共にあれば意味するものは明らかである。人間として行すべきでない行為として、行人偏に“不”の文字を置けば、文字により、行ってはいけないことがわかり、見る人は知らず知らずに薰陶を受けて、将来的にこのような行為を減ずることになる。また、“奸”の字は、獸偏にすれば、獸行という人間に劣る行為を示すことになるから、強姦罪を20%減らすことができる、と確信している。

葉氏は、以上のような字義解釈と文字改造案を提示した上で、“女”偏の文字の由来について、次のように言及している、本来、古代においては体力が重要であったがゆえに、男性が優位となり、体力の弱い女性がしだいに排斥され、教育を受ける権利がなくなり、男性間の交流が社会の中心になった。そのため、文字が男性に独占されるようになり、文字を創造する過程で、女編をもつ貶義の文字が現れることになった、当時の文字の創造者に悪意があったわけではなく、その後の展開は彼らには想像しえなかったであろう。

葉氏が“女”偏の漢字を憂い、その悪影響を危惧する理由は、ただ現前の女性差別を対象にしているからではない。“女”偏をもつ貶義の文字が「女性を尊重しないばかりでなく、中国の将来の主人公たち 児童の健全な成長にもたらすきわめて大きなマイナスの影響をもつこと」、次世代への影響を強く危惧しているためである。具体的に、男児がこれらの漢字の意味を知り、はばかりところのない子どもの発言で女兒をからかったり、女兒に障害ぬぐえない暗い影を与えたり、将来の男尊女卑の重要な要因を作り出したりしはしないか、我々は、彼らにどのような価値観と人生観を与えるのか？ 子どもたちに対して、“婪”、“妒”、“佞”、“妖”、“嫖”が形声文字であり、いずれもが女性と関係すると告げねばならないのであろうか？ 子どもたちは、我々の文化が深くて広いと誇りに思えるだろうか？ と問いかけ、その上で「男女平等を世の中の価値観としたいのであれば、ごく些細なことから始めるべきである。となれば、まず児童から健全で平等な教育をしなければならぬ」と訴えている。

その上で、葉氏は、さらに自らが想定する幾つかの意見を先取りして述べている。

- (1) 女性自身がなにも言っていないのに、男性の葉氏がこの問題を取り上げるのは余計なことだ。中国の女性は善良で、智慧が有り、とうにこの問題に気づいていながら、16の文字が低俗であるから、高潔な品性としては関りたくないということなのだ。

- (2) 16の文字は、大きな辞書の中でわずか10数個であり、“滄海の一粟”にすぎず、とるにたりない。しかし、資質が劣っていて、人を罵りがちな人が、しょっちゅう口にすれば、青少年、児童に対して与える影響はきわめて大きい。
- (3) これら16の文字は、すでに数千年にわたり使用されてきたものだから、変えるのは大変面倒で、人力、物力ともに消耗する。しかし、もちろん可能なら女性を尊重する視点から変えるに値するものである。しかしまた、間違いは男性が創ったものであり、女性は男性が自ら是正することを望んでいる。彼女たちの信頼と寛容さに感謝し、その期待に背くことはできない。ことは早くなされるべきで、遅れをとってはならず、時間が経てば経つほど男性の同胞たちは気まずい境地になろう。

しかし、ジェンダーの視点に立ち、数千年来の文字の変更を求める葉氏の提案に対する賛同者は、上述のように3分の1と少なく⁴、漢字文化の継承性に対する信奉がきわめて強いことがわかる。そうした状況にある程度配慮し、漢字反対論者の反感を和らげるためか、葉氏は、この提案の冒頭で、ひとくだけり中国文化の精髓としての漢字の素晴らしさを提示し、さらに、末尾に、次のような一段を記している。

感謝を知り、相互に尊重しあえる社会を作るためには母親に孝行しなければならない。彼女たちが我々を育ててくれたのであり、我々は妻子を尊重しなければならない。彼女たちは夫と家を支え、風雨をともにしてきたのである。我々は女兒を愛さねばならない。なぜなら彼女たちは我々の国家と民族の未来であるのだから。

母、妻、娘への敬意を示す葉氏の記述に儒教的、伝統的道徳観を見出すことはさして困難ではない。1980年生まれの30歳、改革開放以後の新世代で、フェミニスト弁護士として知られる葉氏ならではの発言であるが、裏を返せば、それは現在の中国社会における男尊女卑、女性差別の根強さをうかがわせるものと言える。

IV. “女” 偏をもつ漢字改訂案への反論

葉氏の提案に対する反論は、単純な感情的反発、必ずしも論拠が明確でない主張が少なくない。葉氏のブログに寄せられ提示されている反論には、

- (1) 16文字には、確かにマイナスの意味が含まれているが、マイナスの意味をもつ漢字ばかりでなく、“好”、“妙”、“嬌”なども見られ、それなりにバランスがとれている。
- (2) 男尊女卑の長い歴史があるから、確かに女性を蔑視する意味が含まれているが、“田”

⁴ 葉(2010c)による。賛成論には、文字が潜在意識に与える影響への認識、海外の先進的なジェンダー視点による言語改革に学ぶ必要性、繁体字から簡体字への移行に比べれば、10数個の文字の改革は些細なものであり、女性に対する尊重の重要性が大きい、貶義の文字を男児、女児に教えることによる具体的な問題点などが挙げられている。本ブログ記載文は、内容的に最初の提起文と重複するところもあるが、改定文字を教育領域から逐次使用することにより社会的負担を増さずにスムーズな移行が可能となること、文字を変えることで男女平等が実現されるとは考えていないこと、ドイツ語、英語など欧米語において単語の変更事例が実現されていることなど、改定提起文より、より具体的な論点が記述されている。

に力を示す“男”という字は、男性だけが田で力仕事をしなければならないという意味を示しておらず、男性蔑視とは言えない。漢字が男性優位とは言えない。

- (3) 問題はあがるが、文字を改造すれば、それで解決するというものではない。カギは思想や文化、教育にある。

といったものが見られる。

こうした意見は、反論としてまとめられるものの、一步踏み込んで読みとけば、葉氏の提起する論点について、単に相反する事例を挙げているにすぎず、提起された問題、課題に対して、具体的に論議しうる内容を提示しているわけではない。たとえば、(1)に挙げられた“好”の字義について、葉氏は、“女”偏に、古代において男子を示す“子”を置く会意文字で、「愛しあう男女は最後には結ばれる」ことを示す優れた作字であり、真髄に迫り、男女が平等である、と述べている(葉 2010b)。しかし、プラスの意味をもつ漢字の存在により、マイナスの意味をもつ漢字の意味や弊害が除去されるわけではない。葉氏が提起した“女”偏をもつ16の漢字の貶義 マイナスの人間性、女性イメージのマイナス性は、プラスイメージをもつ“女”偏の文字の存在によって左右されるものではなく、それらによって論議の深化、発展は得られない。結局、肝心の論点がかみあわぬまま、取り残されているにすぎないのである。(2)は、女性蔑視の意義があることを認めるものの、“男”の文字が男性だけが力仕事をしなければならないという意味を示してはいないから、男性蔑視でもなく、漢字が男性優位であるとも言えないとする。(2)も(1)の“好”と同様、マイナスの人間性と女性形象が共起されることにより生じる問題に答える論議を提示していない。

中村桃子(1995: 117-151)は、「言語改革運動に対する批判とフェミニズムからの再反論」と題して、言語問題とジェンダーを論ずる際に見られる定番的な反論について、4つの特徴から以下のような分類枠を記している。

- (1) ことばが変わることに対する恐れ 反言語変化
- (2) ことばなど大した問題ではない 言葉抹消論
- (3) 差別ではない 性差別否定
- (4) ことばを変えても社会は変わらない 言語兆候論

4つの枠組みは、相互にからみあい、言語改革の課題と問題を考える上で、きわめて示唆が深い。葉氏に対する反論も多くがこの4つの批判に類している。特に、葉氏に対する批判の(3)の「文字を改造しても問題は解決しない」、社会はそれでは変わらない、より大事なことはことばを使う我々の意識、思想こそが問題であると、いった主張は、中村桃子による4つの枠組みの(2)に挙げられた「ことばなど大した問題ではない」、本質的、大切なことはほかにあるといった論議と相互に補完しあい、現在を生きる人々の意識、思想に対して与える問題性を曖昧なものにしている。葉氏の提案は、現在の女性差別に対して問題提起しているのみならず、“女”偏の中で貶義をもつ漢字により、未来世代となる児童に対して、女性蔑視、差別意識が形成され、伝承されているという点、負の意識形成の継承性に注意を喚起している点に重点がある。反論の多くは、現時点で生み出される漢字のもつ差別性に対して、「そうとは言い切れない」とする現象論により、論議を拡散させているにすぎない。

V. 「漢字と女 組み込まれた女性表象」考察の背景

文字を変えても、社会の意識は変わらない、ことばを変えても差別は解消しないという名のもとに、言語差別が再生され、強化されていく現象は、専門家である言語学者による解説、論駁など、社会的な権威をもつ発言により、しばしば正当化され、問題の所在を消失、霧散させる結果を生じやすい。葉氏の「“女” 偏の漢字」に関する提言も中国語学会副会長であり、文字学の専門家（訓詁学）である北京師範大学教授王寧氏の発言により、勢いをそがれた感がある。特に、問題提起者の葉氏が男性であり、反論者の王寧氏が女性であったことは、女性の側からの反論という政治色を多少とも付加したものであると思われる。王寧氏は、『法制晩報』の取材に対して、漢字は伝統文化の積み重ねの中で形成されたものであり、「漢字それ自身に差別の意味はなく符号にすぎない」、「もともと漢字は現代社会とは異なる古代の人々の意識や社会制度を反映するものであるから、言葉狩りをすればそのすべてを変えねばならなくなる」と語った、という⁵。

本特集に収められた田中論文（2011）は、論壇の開催趣旨に提示された王寧教授の言を引き、「漢字それ自身に差別の意味はなく符号にすぎない」として、現状をそのまま受け入れてしまう立場の問題性を指摘している。田中論文は、王教授のいう「符号」を「習慣」に置き換え、さらに、そのような習慣がデュルケムやソシュールにより認知された「社会的事実」にほかならず、それが「個人の外にあって個人を超え、そうして個人に対して絶対的支配力を及ぼす“力”」を表わし、「個人の精神も支配下」に置くものであるがゆえに、「すぎないと」言えるほど軽いものではない、と指摘している。

使用する人間の意識を形成しつつ、ともすれば無意識に内在化されがちなことば、文字について、私たちはもっと自覚的に対象化する必要がある。葉氏の論議は、結局、王教授の発言の後、特に大きな展開を見せぬままに終息したようである。しかし、男性を形成の主体者として生み出され用いられてきた漢字が、意味を伝える道具として機能し、排他性をもつ性文化を形成するものである点に注意を促した意義は、十分認められるべきものであると考える。それは、中国の問題であるばかりでなく、漢字を自らの言語表現に組み込み、多くの人々が漢字に慣れ親しんできた日本人、日本語人である我々にも変わらぬ問題を投げかけている。しかも、日本語が使用する文字は、漢字のみではない。日本語では、漢字のほかに、カタカナ、ひらがなが用いられ、女性を示すことばは、「オンナ・おんな・女」と、複数の表記をもち、使い分けられている。それゆえ、本論壇の広報用チラシ（写真1）で、論壇の主題「ことば・文字・女の解放」について、「どうして「女性」でなくて「女」？ 語ろう「女性」、「女」、「文字」、そして明日の私達を！」と「女性」でなく、あえて「女」の解放を語る問いかけを発したのである。漢字と二種類の仮名文字を用いる日本語は、「オンナ・おんな・女」という同一の名称により、語音を共有しつつ、表記する文字によって伝えられる女性形象の異相を、見事に、明瞭に映し出し

⁵ 矢板（2010）に基づく多数のインターネット記事が見られるが、日本では、否定論が多く見られる。注4の葉天満氏ブログ掲載記事には、『青年週末』記者蔣文娟が簡体字問題をめぐって、教育部の言語文字情報管理司李寧明に電話取材をした記事が記されている。それによれば、個人的見解としながら、「文字はただ言語を記録するだけの符号にすぎない。“犹太人”の“犹”は犬を偏としているではないか、かくいえば、この民族を尊重していないことになる。漢字にはこうした例がとても多い。言語、文字は、習慣によって定まって一般化する文化なのだ」、「道具のよしあしはそれを使ってみて便利かどうかにある。みなが使って便利なら改める必要はなく、改める代価は非常に大きい」と述べている。文字のもつ機能性を重視する見解は、簡体字化など、文字改革推進の基盤となるものであるが、本文中の王寧教授と同様に、「符号」と見なすことにより、表意文字のもつイデオロギー性が削ぎ落されていく点は見落とせない。

ている。文字の書き分けにより、そこに組み込まれた女性存在、囲い込まれた女性表象の意味を掘り起こし、対象化し、その本義を見つめること、そこに言語変革へのささやかだが、確かな歩みの一歩が見出されると考える。



写真1

VI. 「文字と女性 アイデンティティ世界の創生」

日、韓、中、ベトナムを世界の他の地域と色分けした地図がある。アルファベットによる表音文字と漢字による表意文字の使用地域を示した世界地図である。東アジアの三カ国 日、韓、中の言語と文化について語るとき、漢字による文化の形成、漢字資源の存在を無視することはできない。漢字と漢字から作られた仮名文字を使い今日にいたった日本、漢字からハングル文字へと転換してきた韓国、そして漢字以外の文字言語が存在しえない中国、歴史的な文字と文化の関わりを見つめようとすれば、否応なく漢字という文字の領域、権威の聖域に足を踏み込まないわけにはいかない。多大な時間をかけて習得する漢字は、日本において、韓国において、そして中国において、長い間、男性文化の象徴であり、公的社会形成の基盤として機能してきた。近代国家形成期、及びそれ以降の現代社会にいたる歴史過程においては、日、韓、中いずれの地域においても国民教育の展開のもとで、女性もまた排除と共有の両面から漢字文化を取り込み、その文化圏に深く取り込まれていった歴史的経緯がある。

本論壇では、こうした男性主体の漢字文化の中で、排除されたがゆえに独自の文字を自ら生み出し、女性のみコミュニケーション世界を築いた中国の女性専用文字「女書」を取り上げ

た。本特集に寄せられた遠藤論文「女性の創造力の産物：中国女文字」は、「女性差別の産物」（北京清華大学の趙麗明教授）と定義されがちな「女書」を、自らの表現手段を創成した文化形成力として高く評価し、それにより切り拓かれたコミュニケーション世界に盛り込まれた歴史的、文化的意義を丹念に読み解こうとしている。「女書」の成り立ち、特色、歴史的価値、現在の課題と意義については、この遠藤論文に詳しく記述されている。ここでは再論せず、漢字と漢字文化との関わりについてのみ取り上げることにはしたい。

論壇当日配布された遠藤報告の要旨には、女性がほとんど漢字を知らなかった中国解放前の湖南省の一地方、特に限られた一部（江永県と東北部の上江城鎮中心周囲の地域）にのみ、女性による文字が創成された背景、要因について、文字創造の主体である女性と自然的地理的条件に基づく環境など、併せて10項目ほどが挙げられている（遠藤 2011a: 138-139）。その内容によりつつ、さらにこれを文字造形力、人間関係・慣習、物理的環境の三項目から概括してみよう。

(1) 文字造形力：

男性の漢字文化に触れる機会が有り、かつ自らが刺繍、織物など造形的な作業による生産役割を担っていた。

(2) 人間関係・慣習：

少女期に、実の姉妹よりも強い絆となる義理の姉妹の関係（“結交姉妹”）を結ぶ風習があり、気の合った女性たちが集まって共同作業しあう「文化的」環境があった、結婚により分かれる際に、母親・姉妹・“結交姉妹”などととも女性どうしの繋がりを歌にして、思いを伝え合う習慣（“歌堂”）があり、時空をこえて、女性間のコミュニケーションを育む要望が育まれていた、特に、一方的に親の決定に従わされる結婚が婚家の跡継ぎを生み、労働力を提供するためのもので、舅姑の虐待、夫の暴力の待つ悲惨なものが多く、結婚前からの女性どうしの繋がりが結婚後の人生を支える上でも強い絆として求められ、機能していた。

(3) 物理的環境：

女性の労働が織物、刺繍など、語らい、歌うといったコミュニケーションを育める共同作業として成立しうる生産、自然条件をもつ地域であった。

以上のような条件の根底には、遠藤論文が指摘するように、少数民族瑶族と漢族の居住空間の融和、生活交雑による歴史的、社会的な要因が大きく影響している。それぞれ単独であれば、他の地域に見られる要素が、独自の民族交流のもとで融合し、女性が自らの思いを伝える表現手段となる独自の文字文化を創り出すもととなった。しかし、200年～300年ともいわれる長い歴史軸をもって生み出され、継承されてきた女性だけの専用文字が、時の中で刻んできた貴重な生活と女性同士のコミュニケーション世界を語る文書の多くは、文革期に処分されて失われ、さらに今また女性が漢字教育、漢字文化に吸収され、包摂されることにより、自然発生的な後継者をもたない文化遺産に収斂されようとしている。かつて女性たちが、嫁ぐ娘に送り、もらった娘が辛い結婚生活の慰めとした三朝書、晩年に女性たちが記した長い自伝などは、女性たちの生活や思想、文字を生み出した地方の人と社会を語る重要な歴史記録であり、貴重な言語資源、文化資源である。それゆえに女性史はもとより、民衆生活の生きた記録としてのかけがえのない価値を有している。

しかし、それらを踏まえた上で、あらためて「女書」を見直すとき、「女性差別の産物」であり、かつ「女性の創造力の産物」である「女書」が、コミュニケーションを担う文字として、

一つの特長を有していることに気づく。それは、女性世界を取り囲む外なる世界 男性世界に向かわず、ひたすら内なる世界 女性の世界に向かうコミュニケーションツールとして生み出され、機能していたことである。外の世界へ開かれず、ひたすら内なる世界へと向かうベクトルにより構成されるコミュニケーションツールは、女性たちが自らを外なる男性社会から隔離し、創り出す言語手段であった。ことば、文字は、外界に向かって広がり、伸展していくとき、他者を抑圧する機能を生み出す。その意味で「女書」は、ひたすら内に向かい、外への伸展、拡大を求めない文字であったがゆえに、それ自身の内部 内なる世界で終息し、完結する性格を内在していた。それゆえに、漢字が男女に開かれた文字として共有された時点で、女性固有の文字であった「女書」とその担い手は、男性を主体とする漢字文化の世界に吸収され、取り込まれ、歴史的な使命を終えざるを得ない道をたどるものとなった。言い換えれば、男性社会から自らを隔離し、固有の文字世界を生み出した中国女性文字の造形力は、男性主体の文字文化 より端的に言えば、“女”偏をもつ漢字世界、男性主体の文字文化に組み込まれ、その言語体系の内に包摂されることになったのである。その意味で、女性専用文字を作った中国の女性と文字の形成史は、今まさにあらたな創造と変革の課題に直面している、と見えよう。

VII. おわりに

本論壇では、漢字文化に組み込まれた女性形象と、担い手としての男性文化から排除されたがゆえに生み出され、女性のみでのコミュニケーション世界を築いた中国の女性専用文字「女書」を取り上げ、性差を乗り越えて切り拓かれるべき明日の文字文化、女の解放を見つめようと意図した。

アジアの諸言語、とりわけ漢字を使う言語は、表意文字であるだけに、文字を通して、幾千年も前に生まれた封建社会の思想、イデオロギーを伝え続けていく。しかし、現代社会に生きる我々は、ともすれば事の意味を深く問うことなく、当たり前のもので、漢字による受け渡しを無意識に行っている。進化、進歩なるものをどうとらえるか、その是非、功罪については、多種多様な解釈、人により好悪の別さえある。しかし、漢字が生まれた古代からの人間の歴史の進展の上に、現代の人と社会が成立していることは、誰しも首肯せざるを得まい。歴史的、伝統的、文化的遺産の継承という価値観を盾にすれば、新たな変革を求める声は、かき消されやすく、往々にして力となりにくい。言語変革への提言が力となりにくい要因について、本特集の田中論文（2011）は、「変わることを好まず許さないぞ、という人間の意識」があり、その源には社会と文化を成り立たせている根源の問題があると指摘している。そして、個人の意識をしぼる言語に向かう変革運動は、変革運動のなかで最も困難な課題に面しており、「それゆえにソシユールもこのことから“言語には革命は生じえない”と言っているくらいである」と述べている。では、言語が変革されるためには、なにが必要なのか？ ことばを発展させるために必要なのは、「壊し、乱す力」であるという。

はるか昔の古代社会の観念を示す“女”偏16文字の漢字改革を提起した葉満天氏の問題提起は、結果的に現段階では、目に見えるような功は奏さなかった。いや、話題としても、インターネットゆえの一過性の熱風に煽られたにとどまったと言ってよからう。最初に提起され、論議を読んだ“女”偏16文字に対する提起文（2010年1月21日）は、2011年12月10日現在で、閲覧数は280,578、寄せられた意見3,448であるが、1月30日に行われ、4月10日に掲載された『青年週末』の蒋文娟記者との対談インタビュー（一問一答式）のブログインタビュー記事の関

読数はわずか39、寄せられた評論はゼロである⁶。人々の関心、そして変革を可能とする「乱す力」への展開は、確かに容易ではない。しかし、それは葉氏が提起した問題の意義、重要性をいささかも減ずるものではない。逆に、ともすれば変革への意識を、無自覚、無意識の内に埋没させ、滅却させがちな言語感覚をあらためて研ぎ澄まし、問題の所在を見つめ、数千年昔の人と社会が生み出し、以来、継承されてきた漢字のもつ功罪と向き合い、今を生きる我々の世代とその後を担う次世代が将来どのように漢字、そして仮名を含む文字、ことばといかに対話していくのか、を問い続ける必要がある。日本語を母語とする我々がどのように「ことばと文字と女の解放」の問題を見つめ、関わっていくのか、言語とジェンダーを見つめる視点から、生み出されるアイデンティティ創生へのささやかな一歩を求める一つの契機として、この論壇を位置づけることにしたい。

参考文献

< 日本語文献 >

- 遠藤織枝 1996年 『中国の女文字 伝承する中国女性』、東京：三一書房。
 2002年 『中国女文字研究』、東京：明治書院。
 黄由貞編著 2009年 『消えゆく中国女文字』、東京：三元社。
 2011a年 「中国女文字の“すごさ”とそれを産んだ女性たちの“すごさ”」(「ことば・文字・女の解放」報告要旨、12月12日) 湯山(2011)所収、138-140頁。
 2011b年 「女性の創造力の産物：中国女文字」、『アジア太平洋研究』No.36、71-85頁。
 田中克彦 1999年 『ことばのエコロジー』、東京：筑摩書房。
 2011年 「言語からみたジェンダーの問題」、『アジア太平洋研究』No.36、65-69頁。
 丹藤佳紀 2010年 「女性蔑視の女偏の漢字16字を改造すべきだ 中国の若手弁護士が公開状で提案」、『リベラル21』、<http://blog.sina.com.cn/yemantian>、2010年1月30日。
 中村桃子 1995年 『ことばとフェミニズム』、東京：勁草書房。
 矢板明夫 2010年 「女性差別だ、女偏の漢字改めよ！中国で改革案...でも反対論優勢」、『産経ニュース』、<http://sankei.jp.msn.com/world/china/100125/chn1001250931000-n1.htm>、2010年1月25日。
 湯山トミ子編(成蹊大学アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「アイデンティティの創生と多元的世界の構築 アジア・中国の磁場から」代表)2011年 『多元的世界への問い 帝国の時代の言語とアイデンティティの創生』、名古屋：三恵社。

< 中国語文献 >

- 叶满天(葉満天) 2010a年 「16汉字构造之错 - 不尊重妇女, 又误导儿童人生观」、http://blog.sina.com.cn/s/blog_44aaa2c80100w27b.html、2010年1月21日。
 2010b年 「关于部分朋友对“好”字结构的看法」、http://blog.sina.com.cn/s/blog_646e13fa0100h0sr.html、2010年1月22日。
 2010c年 「16汉字歧视女性? 律师叶满天走红网络(转)」、http://blog.sina.com.cn/s/blog_646e13fa0100hyvo.html、2010年4月1日。

⁶ 注4に同じ。